The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	親密化過程における自己開示機能の探索的検討 ： 自己開示に対する願望・義務感の分析から
Author(s)	丹野, 宏昭; 下斗米, 淳; 松井, 豊
Citation	対人社会心理学研究. 2005, 5, p. 67-75
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/4627
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

親密化過程における自己開示機能の探索的検討 1)2)3)
―自己開示に対する願望・義務感の分析から―

丹野　宏昭（筑波大学人間総合科学研究科）
下斗米　淳（専修大学文学部）
松井　豊（筑波大学人間総合科学研究科）

友人関係の親密化過程における自己開示の機能を親密段階別に推定するために、自己開示量と同時に自己開示願望、義務の2つの意識を領域別に検討した。大学生220名(男性105名、女性115名)を有効回答者とした質問紙調査を行った。同性の友人を各1名想定させ、作成した自己開示質問紙を用いて、想定相手との自己開示量、自己開示願望、自己開示義務、親密感を測定した。その結果、自己開示量は、親密化にともない、どの領域も線形に増加することが示された。自己開示願望は、活動共有の促進に関連する領域が中期に増加していた。自己開示義務は、時間的・空間的な関係の広がりの促進に関する領域が中期に、類似性・異質性の認知に関する領域が後期に増加していた。本研究の結果から、友人関係の親密化過程における自己開示の機能は、親密段階によって変化すると推定された。

キーワード：友人関係、親密化、自己開示

本研究は、代表的な対人関係のひとつである友人関係に注目し、親密化過程における自己開示の機能について検討する。具体的には、自己開示に対する願望と義務感の２つの意識を、開示の対象となる内容(領域)ごとに、親密段階別に分析することで、自己開示の機能を推定する。

対人関係の変化にともなう自己開示の変化

Jourard(1958)以降、自己開示研究は心理学のさまざまな分野で行われてきた。Cozby(1973)は自己開示を「ある人物Aが、自分に関する情報について言語を用いて人物Bに伝える行動」と定義し、重要な機能をもつコミュニケーション行動の１つであると捉えている。Jourard(1971)では、対人関係には相互理解が重要であり、自己開示を行うことにより相互理解が増幅されるため、対人関係には自己開示が重要であると論じられている。

実際の対人関係においては、関係の親密段階によって開示される領域や自己開示量が変化することが明らかにされている。自己開示は自分自身の弱点を晒すことにつながりうるため、深い領域の自己開示は、相互に信頼感をもつ親密な関係にあることが必要であると指摘されている(Derlega, Metts, Petronio, & Mergulis, 1993；Jourard, 1971)。さらに、相互の信頼感が増し、対人関係が親密化するにつれ、深い領域についても開示されるようになり、自己開示量が増加することが明らかにされている(Altman & Taylor, 1973; Won-Doornink, 1979)。以上のように、開示される領域や自己開示量は親密段階によって変化する。

開示される領域ごとに自己開示量を検討した研究では、榎本(1987)が、11 領域からなる自己開示質問紙(ESDQ-44)を用いて、大学生を対象に、友人関係における自己開示量について検討している。開示される領域ごとに自己開示量を比較した結果、もっともよく開示されている領域は、知識に関する領域と志向に関する領域であり、開示量の少ない領域は性に関する領域、家族に関する領域、外見に関する領域であった。下斗米(1990)は、大学生に対する調査により、友人関係における自己開示量と親密段階の関連について検討している。開示される領域ごとに自己開示量を検討した結果から、親密度の高い段階では、社会態度・意見、恋愛、能力、人格、友人関係、身体・容姿に関する自己開示量が顕著に多いことが明らかにされている。

以上のように、自己開示は対人関係にとって重要であり、自己開示量は親密段階および領域によって変化することが明らかにされている。そこで本研究では、開示される領域に着目し、親密段階による領域ごとの自己開示の変化をあつかう。

対人関係における自己開示の機能

自己開示は対人関係の親密化に影響を与えることが明らかにされている(Jourard, 1971)。本研究では自己開示の意識の分析を通して、自己開示の機能を検討する。ここでは、従来の自己開示研究における機能に関する知見を整理する。

自己開示が対人関係の親密化に与える影響について、対人魅力の側面から検討した研究では、自己開示には対人魅力を増加させる機能があることが報告されている(e.g., Cozby, 1972; 中村, 1984, 1986; Rubin, 1975)。下斗米(1992)は、類似性が親密化において重要である理由の１つとして、趣味などの類似が接触頻度を増加させることを挙げている。さらに下斗米(1990)は、自己開示により相互の情報を交換することを通して、類似性・異質

性の確認が促進し、その過程により親密化が進むことを論じている。これらの知見より、自己開示には、類似性を確認することで、接触頻度を増加させる機能があると考えられる。

下斗米(1992, 1999a, 1999b, 2000)は、大学生の友人関係を扱った研究結果より、親密化過程では、相互の類似性・異質性を確認することを通じて、役割行動の分担を行う過程が生じていると結論している。この知見から、自己開示には類似性・異質性を確認することで役割行動の分担を促進する機能があると考えられる。

Derlega et al.(1993)は、相手から個人的な領域の情報を開示されると、相手から信頼され、尊重されていると感じ、相手に対して親密感を抱くと論じている。さらに、Altman & Taylor(1973)は、信頼が生起し、交換される自己開示の広がりや深さが増すことで、さらに関係の広がりや深さが増すことを理論化している。これらの知見から、自己開示には、個人的な深い領域の情報を開示しあうことで、相互に信頼を伝えあい、関係の広がりや深さを増す機能があると考えられる。

以上より、自己開示は対人関係の親密化において、合意的妥当化の促進、接触頻度の増加、役割行動分担の促進、信頼の増加、関係の広がりや深さの増加などの機能を有すると推定される。

さらに、Chaikin & Derlega (1974a,1974b)は、同じ領域について、同じ量だけ自己開示したとしても、親密段階が異なれば、対人関係に与える影響が異なることを明らかにしている。したがって、親密段階によって、自己開示の機能も異なっていると推定される。しかし、榎本(1997)は、親密化過程のそれぞれの局面における自己開示の役割についてはまだ十分に研究されていないと指摘しており、各親密段階においてどのような自己開示の機能がはたらいているかは明らかになっていない。

本研究では、各親密段階においてどのような自己開示の機能がはたらいているのかを検討する。

自己開示願望と自己開示義務

各親密段階において、どのような自己開示の機能がはたらいているか明らかにされてこなかった理由の1つとして、従来の研究では、自己開示量と開示される領域との側面のみが注目されていたことが考えられる。自己開示の機能を検討するためには、開示に対する願望や義務感などの意識をも含めて検討することが必要であろう。

Jourard(1971)は、欲求どおりに自己開示することが適応に結びつき、反対に、欲求どおりに自己開示できない、もしくは「開示したくない」ことを自己開示させられることが不適応に結びつくと指摘している。さらに、社会的交換理論の立場から対人関係を検討した研究では、関係から得られるものが自分の欲求や願望と一貫していないと、不満足や不適応が生じ関係が悪化するが、関係から得られるものが欲求や願望と一貫していると、満足感や適応感が生じ、関係への関与が増加し、関係が親密化すると論じられている(e.g., 諸井, 1989; Walster, Walster, & Bersheid, 1978)。これらの知見から、開示に対する欲求・願望と一貫した自己開示には、満足感や適応感を生じ、関係への関与を増加させ、関係を親密化させる機能が存在すると考えられる。自己開示量が増加しても、欲求や願望と一致しない場合には、関係に対する不満が生じると予想される。自己開示の機能には開示に対する欲求・願望の意識が関連していると考えられる。

一方、開示に対する規範から生じる義務感の意識も、自己開示の機能と関連していると考えられる。安藤(1990)は、さまざまな状況によって、開示される領域や自己開示量に関する規範が存在し、この規範から逸脱した自己開示を行うと、周囲から否定的な評価を与えられることがあると指摘している。さらには、Argyle & Henderson(1985)や Duck(1991)は、対人関係には規範が存在し、規範から逸脱した行動は関係を悪化させるが、規範にもとづいた行動は関係の崩壊を防ぎ、対人魅力を増加させることを明らかにしている。

これらの知見から、開示に対する規範と一貫した自己開示には、関係の崩壊を防ぎ、対人魅力を増加させ、関係を親密化する機能が存在することが考えられる。自己開示には、さまざまな規範があると考えられるが、本研究では、「開示すべきである」もしくは「開示すべきではない」という規範と密接に関連する義務感に着目する。日常の対人関係においては、「開示すべきである」ことを開示しないことから、開示相手に対して申し訳なさを感じたり、「開示すべきではない」ことを開示することで後悔を感じたりすることがあると予想される。したがって、自己開示量が増加しても、開示に対する義務感と反していれば、親密化が妨げられると考えられる。このように、自己開示の機能には開示に対する規範から生じる義務感の意識が関連していると考えられる。

以上のように、自己開示には、開示に対する欲求・願望や、開示に対する義務感などの意識が存在し、自己開示の機能と関連していると考えられる。自己開示量や開示された領域といった行動側面と同時に、開示に対する欲求・願望や義務感の意識に着目することで、自己開示の機能をより詳細に検討できると期待される。本研究では、開示に対する欲求・願望を「自己開示願望」、開示に対する規範から生じる義務感を「自己開示義務」と呼び、親密段階ごとに測定することとする。

本研究の目的

以上のように、従来の自己開示研究から、親密段階によって領域ごとの自己開示量は変化し、自己開示は対人

関係の親密化に影響をおよぼすことが明らかになっている。親密段階によって自己開示の機能が異なっていると推察されるが、親密段階による機能の相違を検討した研究はみられない。

従来の研究では、自己開示量という行動側面のみが注目されていたが、自己開示願望および自己開示義務の意識側面に着目することで、これまで明らかにされていなかった親密段階による自己開示の機能の異なりを明らかにすることができると期待される。

本研究では、大学生の友人関係を対象とした調査により、領域ごとの自己開示願望および自己開示義務と自己開示量が、親密段階間でどのように異なっているのかを探索的に検討する。以上の検討を通して、各親密段階における自己開示の機能に関する示唆を得ることが、本研究の目的である。

方法

調査対象

神奈川県の私立大学に通う大学生231名(男性 113 名、女性118名)を調査対象者とした。全回答者231名のうち、記入漏れなど回答に不備のあった回答者 11 名を除き、220名(男性105名、 女性115名)を有効回答者とした。有効回答者の平均年齢は19.6歳であった。

調査時期

2003年5月に実施した。

調査方法

個別記入形式の質問紙調査で実施した。個別配布, 個別回収形式で行った。回答はいずれも無記名で行われた。

調査内容

以下の質問項目からなる質問紙の回答を求めた。

a.**フェイスシート** 調査対象者の年齢、性別の記入を求めた。

b.**知人の想定** 「大学に入学してから知り合った人で、日常生活で関わりあいの多い同性の人間を1人想定してください」という教示文を提示し、1人の人物の想定を求め、その人物の名前のイニシャルと年齢を回答させた。これは、今後の質問に対し、想定人物を明確に意識化しながら回答させるための操作であり、本研究では分析していない。

c.**自己開示量** 下斗米(1990)の作成した10領域36項目からなる自己開示質問紙を参考に、各領域から3項目ずつを抽出し、30項目からなる自己開示質問紙を作成した。「以下の話題について、想定した方と、ふだんどの程度話しているかお答えください」という教示文を提示し、「1.全く話していない」、「2.ほとんど話してはいない」、「3.あまり話していない」、「4.どちらともいえない」、「5.少し話している」、「6.かなりよく話している」、「7.十分に話している」の7件法で回答を求めた。

d.**自己開示願望** 質問項目は「c.自己開示量」と同じ項目を用いた。「以下の話題について、想定した方と、ふだんどの程度話したいと思っているかお答えください」という教示文を提示し、「1.話したくはない」、「2.ほとんど話したくはない」、「3.あまり話したくはない」、「4.どちらともいえない」、「5.少し話したいと思う」、「6.話したいと思う」、「7.とてもよく話したい」の7件法で回答を求めた。

e.**自己開示義務** 質問項目は「c.自己開示量」と同じ項目を用いた。「以下の話題について、想定した方と、ふだんどの程度話すべきであると思っているかお答えください」という教示文を提示し、「1.全く話すべきではない」、「2.ほとんど話すべきではない」、「3.あまり話すべきではない」、「4.どちらともいえない」、「5.少し話すべきである」、「6.よく話すべきである」、「7.十分に話すべきである」の 7 件法で回答を求めた。

f.**親密感** この質問項目は、ある特定の人物との親密さの強さを相対的にいくつかの親密段階に分類するために設定した。「想定した人物とは、どの程度親しいといえますか」という教示文を提示し、「1.極めて親しくない」、「2.かなり親しくない」、「3.親しくない」、「4.やや親しくない」、「5.どちらともいえない」、「6.やや親しい」、「7.親しい」、「8.かなり親しい」、「9.極めて親しい」の 9 件法で回答を求めた。

結果

親密段階の分類

親密感評定値に基づいて、下斗米(1990)などと同様の方法を用いて、調査対象者を3段階に分類した。各段階の人数をできるだけ均等に分割するために、親密感評定で1〜6と回答した人物を関係初期段階、7と回答した人物を関係中期段階、8〜9 と回答した人物を関係後期段階と操作的に定義した。その結果、初期段階に 51 名(男性27名、女性24名)、中期段階に83名(男性39名、女性44名)、後期段階に86名(男性39名、女性47名)が振り分けられた。

自己開示領域の特定化

開示に対する意識のうち、自己開示義務の評定値を用いて、自己開示質問紙 30 項目について因子分析(主因子法、バリマックス回転)を行った。固有値 1.00 以上を因子抽出の基準としたところ、7因子が抽出された(Table 1)。累積寄与率は 73.46%であった。また、自己開示量および自己開示願望の評定値を用いて同様に因子分析を行ったところ、同じ因子構造と考えられる7因子が抽出された。そのため、自己開示質問紙における7因子は、自己

Table 1 自己開示項目の因子分析結果(主因子法、バリマックス回転後)

	友人･人格	能力･学業	生活	恋愛	態度	趣味	進路
自分の性格で他人とは違うと思う部分	**.753**	.230	.189	.139	.141	.088	.238
直したいと考えている性格側面	**.731**	.266	.169	.139	.147	.083	.256
自分の性格の長所や短所	**.719**	.285	.133	.134	.187	.124	.300
友人との日ごろの付き合い方	**.711**	.039	.163	.205	.102	.317	.147
友人関係に関する悩みごと	**.687**	.109	.244	.229	.199	.287	.212
友人としての相性のよい人･悪い人	**.650**	.064	.200	.215	.144	.269	.136
特技についての話	.183	**.758**	.010	.146	-.010	.213	.031
学校の成績	.125	**.690**	.206	.171	.082	.070	.154
持っている資格や免許	.110	**.686**	.206	.150	.001	.121	.035
頭の良さについての自己評価	.136	**.684**	.209	.293	.040	.056	.034
好きな授業科目･嫌いな授業科目	.101	**.672**	.165	.108	.160	.145	.190
学校に対する不満	.087	**.633**	.100	.152	.206	.095	.118
親や兄弟と自分の関係	.208	.178	**.888**	.079	.127	.138	.113
家族内での自分の役割	.223	.207	**.815**	.021	.164	.098	.034
理想の家庭像	.274	.158	**.692**	.100	.152	.118	.168
過去の病気や怪我	.012	.196	**.548**	.168	.074	-.028	.073
体調に関しての悩み	.137	.252	**.536**	.333	.164	.022	.181
これまでの恋愛体験	.255	.305	.055	**.752**	-.012	.220	.034
異性関係に関する悩みごと	.296	.309	.119	**.726**	.041	.286	.054
異性の好み	.236	.327	.078	**.667**	-.004	.337	.038
自分の容姿や身体についての不満	.169	.225	.375	**.614**	.043	.030	.185
社会に対する不満	.179	.147	.140	.011	**.879**	.089	.125
社会問題への意見	.199	.128	.131	.040	**.877**	.100	.184
道徳やモラルについての考え･態度	.158	.055	.202	.019	**.854**	.123	.132
好きな映画や音楽についての話題	.213	.207	.080	.141	.096	**.903**	.122
趣味としている事柄	.263	.232	.092	.191	.182	**.786**	.136
休日の過ごし方	.264	.194	.126	.228	.098	**.700**	.126
将来への期待や不安	.382	.140	.177	.102	.192	.133	**.804**
就きたい職業について	.369	.177	.180	.112	.191	.172	**.766**
卒業後の進路に関する計画	.368	.212	.137	.061	.224	.149	**.753**
固有値	12.677	2.977	2.344	1.898	1.575	1.205	1.024
寄与率(%)	14.127	12.941	10.832	9.297	9.239	8.992	8.033
信頼性係数(α)	.933	.886	.886	.904	.948	.936	.955

「友人関係･人格」を、表中では「友人･人格」と略して示した。

開示量と自己開示願望･義務を通じて共通する因子構造であると解釈された。

第 1 因子は「自分の性格で他人とは違うと思う部分」、「直したいと考えている性格側面」、「自分の性格の長所や短所」、「友人との日ごろの付き合い方」、「友人関係に関する悩みごと」、「友人としての相性のよい人･悪い人」といった、自分の性格や友人との関係に関する項目に高い負荷量を示し、「友人関係･人格」因子と命名された。第 2 因子は「特技についての話」、「学校の成績」、「持っている資格や免許」、「頭の良さについての自己評価」、「好きな授業科目･嫌いな授業科目」、「学校に対する不満」といった、自分の能力に関することや学校･勉強に関する項目が高い負荷量を示し、「能力･学業」因子と命名された。第 3 因子は「親や兄弟と自分の関係」、「家族内での自分の役割」、「理想の家庭像」、「過去の病気や怪我」、「体調に関しての悩み」といった、家庭生活に関することや日常生活での健康に関する項目が高い負荷量を示し、「家族･健康」因子と命名された。第 4 因子は「これまでの恋愛体験」、「異性関係に関する悩みごと」、「異性の好み」、「自分の容姿や身体についての不満」といった、異性や恋愛に関する項目が高い負荷量を示し、「恋愛」因子と命名された。第 5 因子は「社会に対する不満」、「社会問題への意見」、「道徳やモラルについての考え･態度」といった、社会一般に対する意識に関する項目が高い負荷量を示し、「社会態度」因子と命名された。第 6 因子は「好きな映画や音楽についての話題」、「趣味としている事柄」、「休日の過ごし方」といった、趣味に関する項目が高い負荷量を示し、「趣味」因子と命名された。第 7 因子は「将来への期待や不安」、「就きたい職業について」、「卒業後の進路に関する計画」といった、今後の将来や就職などに関する項目が高い負荷量を示し、「進路」因子と命名された。以降、この 7 因子を自己開示領域として扱い、各領域を構成する項目の点数を足して、項目数で割ったものを各領域の尺度得点とした。

因子の信頼性を検討するために、各因子のクロンバックのα係数を算出したところ、いずれの因子も.88 以上の値を示し、各尺度の高い信頼性が確認された(Table 1)。

領域別の自己開示の推移

各親密段階における自己開示領域別の自己開示量と自己開示願望･義務の平均および標準偏差をTable 2～

4 に示した。また、自己開示領域ごとに一元配置分散分析とTukeyの多重比較を行い、自己開示量と自己開示願望・義務の値に親密段階間で差があるかどうかを検討した[4]。その結果、自己開示量は、どの領域においても初期段階より中期段階、中期段階よりも後期段階の値が高かった。

自己開示願望は、どの領域においても親密段階間で差が見られた。多重比較の結果、「友人関係・人格」、「趣味」、「進路」の領域では初期段階よりも中期段階および後期段階に高く、「能力・学業」、「家族・健康」、「恋愛」、「社会態度」の領域では初期段階よりも後期段階が高かった。また自己開示願望は、後期段階より中期段階が高い領域や、中期段階より初期段階が高い領域がみられなかったため、全体的に親密段階が進展するほど高くなる傾向がみられた。

自己開示義務は、「能力・学業」以外の領域において親密段階間で差が見られた。多重比較の結果、「社会態度」、「趣味」の領域では初期段階および中期段階よりも後期段階に、「家族・健康」、「進路」の領域では初期段階よりも中期段階および後期段階に、「恋愛」の領域では初期段階よりも後期段階に、「友人関係・人格」の領域では初期段階よりも中期段階、中期段階よりも後期段階に高かった。また自己開示義務は、後期段階より中期段階が高い領域や、中期段階より初期段階が高い領域がみられなかったため、全体的に親密段階が進展するほど高くなる傾向がみられた。

Table 2 各親密段階の自己開示量

	初期段階 *n*=51		中期段階 *n*=83		後期段階 *n*=86				
	平均	(標準偏差)	平均	(標準偏差)	平均	(標準偏差)	*F*値		多重比較結果
友人・人格	3.16	(1.34)	4.21	(1.15)	5.15	(1.02)	48.056	**	初<中<後
能力・学業	3.64	(1.25)	4.31	(1.01)	4.91	(1.05)	21.757	**	初<中<後
生活	2.45	(1.27)	3.28	(1.26)	4.02	(1.24)	25.039	**	初<中<後
恋愛	3.26	(1.36)	4.03	(1.05)	4.59	(1.07)	21.793	**	初<中<後
態度	2.75	(1.32)	3.34	(1.43)	4.13	(1.48)	16.043	**	初<中<後
趣味	3.91	(1.49)	4.81	(1.15)	5.38	(1.10)	22.999	**	初<中<後
進路	3.37	(1.76)	4.28	(1.51)	5.18	(1.26)	24.469	**	初<中<後

Table 3 各親密段階の自己開示願望

	初期段階 *n*=51		中期段階 *n*=83		後期段階 *n*=86				
	平均	(標準偏差)	平均	(標準偏差)	平均	(標準偏差)	*F*値		多重比較結果
友人・人格	4.24	(1.24)	5.03	(1.12)	5.15	(1.02)	19.522	**	初<中,後
能力・学業	4.14	(1.20)	4.44	(1.08)	4.91	(1.15)	4.757	**	初<後
生活	3.35	(1.30)	3.84	(1.29)	4.02	(1.23)	5.995	**	初<後
恋愛	3.99	(1.25)	4.29	(1.04)	4.59	(1.08)	5.719	**	初<後
態度	3.75	(1.54)	4.23	(1.37)	4.47	(1.55)	3.705	*	初<後
趣味	4.94	(1.05)	5.58	(1.37)	5.38	(1.55)	4.085	*	初<中,後
進路	4.59	(1.40)	5.46	(1.19)	5.18	(1.12)	13.432	**	初<中,後

Table 4 各親密段階の自己開示義務

	初期段階 *n*=51		中期段階 *n*=83		後期段階 *n*=86				
	平均	(標準偏差)	平均	(標準偏差)	平均	(標準偏差)	*F*値		多重比較結果
友人・人格	4.44	(1.11)	5.00	(1.10)	5.50	(0.96)	16.441	**	初<中<後
能力・学業	4.28	(1.00)	4.24	(1.00)	4.58	(1.04)	2.757		
生活	3.58	(1.09)	4.04	(1.18)	4.32	(1.04)	7.183	**	初<中,後
恋愛	4.24	(1.17)	4.58	(1.14)	5.03	(1.24)	7.550	**	初<後
態度	4.24	(1.21)	4.54	(1.27)	5.10	(1.32)	8.160	**	初,中<後
趣味	4.71	(0.96)	4.98	(1.14)	5.40	(1.00)	7.532	**	初,中<後
進路	4.56	(1.32)	5.36	(1.23)	5.77	(1.02)	16.902	**	初<中,後

Table 2～4: 多重比較結果(Tukey法、5%水準)は、初期段階、中期段階、後期段階を比較し、差がみられたものを不等号で示した。 F値(df = 2, 216), $^{**}p<.01$, $^{*}p<.05$

自己開示願望･義務と領域の構造

Table 3、4 の全体的傾向を把握し、各親密段階における開示に対する意識の構造を検討するために、7領域の自己開示願望および自己開示義務をアイテムカテゴリー、親密段階をサンプルとしたクロス表に基づく数量化III類(双対尺度法)を行った。分析の結果、固有値は、成分1が.021、成分2が.019であった。成分1の負荷量を横軸、成分2の負荷量を縦軸とした二次元平面状に、カテゴリースコアとサンプルスコアをプロットした結果が Figure 1である。

解析の結果、第一に左上には、「義務 能力･学業」がプロットされており、このカテゴリーのそばには「初期」がプロットされていた。第二に、右側には、「願望 友人･人格」、「願望 家族･健康」、「願望 社会態度」、「願望 趣味」、「願望 進路」、「義務 友人･人格」、「義務 家族･健康」、「義務 進路」がプロットされており、これらのカテゴリーのそばには「中期」がプロットされていた。第三に、左下には、「願望 能力･学業」、「願望 恋愛」、「義務 友人･人格」、「義務 社会態度」、「義務 恋愛」、「義務 趣味」がプロットされており、これらのカテゴリーのそばには「後期」がプロットされていた。

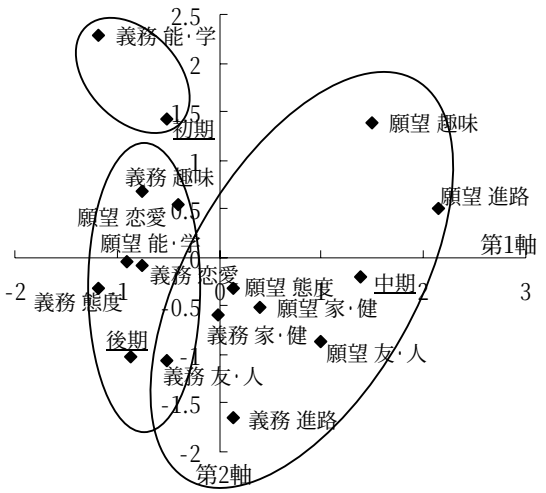

Figure1 自己開示願望と自己開示義務の構造

図中では、「友人関係･人格」を「友･人」、「能力･学業」を「能･学」、「家族･健康」を「家･健」、「社会態度」を「態度」と表記した。

考察

本研究は友人関係の親密化過程における自己開示の機能を検討するために、開示領域別に、3 つの親密段階における自己開示量および自己開示願望と自己開示義務を検討した。

自己開示量･願望･義務の変化

各親密段階における自己開示量および自己開示願望と自己開示義務の値と、その多重比較結果(Table 2～4)をみると、自己開示量はどの領域においても、親密になるほど増加する関係がみられた。一方、先行研究では、浅い領域の自己開示量は親密化にともない徐々に減り、深い領域の自己開示量は親密段階と逆U字型の関係にあるという結果が示されている(e.g., Altman & Taylor, 1973; Won-Doornink, 1979)。これは、本研究の調査対象者の多くが大学の新入生であり、他の研究に比べ、親密感が低い関係にある調査対象者が含まれていたためであると考えられる。そのため、本研究では親密段階による自己開示量の差が顕著に表れたと推定される。

一方、自己開示願望や自己開示義務は、自己開示量とは異なる変化を示した。自己開示したいという願望の大部分は関係の中期段階ごろに上がり、自己開示しなければならないという義務感は、領域によってその変化の様相が異なっていた。

自己開示願望と自己開示義務はいずれも、後期段階より中期段階に高い領域や、中期段階より初期段階に高い領域がみられなかった。そこで、クロス表にもとづく数量化III類の結果(Figure 1)に注目しながら、初期段階から中期段階、中期段階から後期段階に大きく変化している領域を調べた。自己開示願望において、「友人関係･人格」、「趣味」、「進路」の領域は、Figure 1 上で原点から離れてプロットされており、多重比較の結果をみると中期段階に高くなる特徴がみられた。このように、「友人との日ごろの付き合い方」、「好きな映画や音楽についての話題」、「将来への期待や不安」といった項目に代表される領域について開示しあうことは、一緒に遊ぶことや勉強することなど、活動を共有することの増加につながると考えられる。そして、活動の共有の増加により、さらなる親密化を促進する機能が考えられる(e.g., 下斗米, 1992)。このように、友人関係の中期段階には、関係の深化のために、接触頻度の増加と関連する自己開示願望が増加すると解釈できる。

自己開示義務において、「家族･健康」、「進路」の領域は中期段階の近くにプロットされ、多重比較の結果をみると中期段階に高くなる特徴がみられた。「理想の家庭像」、「将来への期待や不安」の項目に代表されるこの領域は、いずれも時間的に過去や未来の事柄であり、大学生活とは異なる空間に関する事柄を含んでいる。すなわちこの2つの領域は、友人関係の主な舞台である大学生活とは、異なる時間や空間に関する領域であると考えられる。このような現在の友人関係の舞台とは異なった時間･空間に関する情報を授受することは、関係が時間的･空間的にも広がりを生じるのに影響すると考えられる。したがって、友人関係の中期段階には、関係の深化のために、関係を時間的･空間的に広げることを促進する自己開示義務が増加すると解釈できる。

「趣味」、「社会態度」の領域の自己開示義務は Figure 1 上では原点から離れてプロットされており、多重比較の結果をみると後期に高くなっていたことから、後期段階に特徴的な領域であると推察された。「休日の過ごし方」や「道徳やモラルについての考え・態度」といった領域に代表されるこの領域は、どちらも「互いがどのように考え、行動するか」に関連する領域であり、このような領域に関する開示は互いの類似点と相違点を確認し、それにもとづき行動や役割を決定するために重要であると考えられる(e.g., 下斗米, 1992, 1999a, 1999b, 2000)。このように、友人関係の後期には、互いの類似性や異質性の認知を通して行動や役割の決定を促進する領域の自己開示義務が増加すると解釈できる。

「友人関係・人格」の領域の自己開示義務は、親密段階の進展にともない線形に増加していた。この領域は「友人との日ごろの付き合い方」や「自分の性格」に関する領域である。友人関係が親密になればなるほど、自分の性格や、友人との関係性に関する深い情報が開放され、さらに親密な関係へと変化していくと考えられる(e.g., Busse & Birk, 1993)。このように、関係が親密になるほど、自分の性格や友人との関係性に関する領域の自己開示義務が増加すると解釈できる。

自己開示の機能の変化

以上のように本研究では、自己開示量は、友人関係の親密化にともない増加するという線形関係がみられた。自己開示願望に関しては、中期段階に接触頻度の増加につながる領域が増加していた。自己開示義務に関しては、中期段階に現在の関係とは異なる時間・空間に関する情報の自己開示義務が増加し、後期段階には類似性・異質性の認知に関する情報の自己開示義務が増加していた。「友人とのつきあい方や人格」に関する情報は、関係が親密になるほど自己開示義務が増加していた。

まだ友人関係が充分に親密化していない中期段階には、接触頻度を増加させて活動共有の促進につながる領域の自己開示願望と、時間的・空間的に関係の広がりを促進する領域の自己開示義務、親密化がさらに進んだ後期段階では、相互の類似性・異質性を確認し、互いの行動や役割の決定を促進する領域の自己開示義務が増加していた。

これらの結果を概観すると、友人関係においては、まず接触頻度や活動共有を促進する自己開示の機能と、時間的・空間的に関係の広がりを増す機能とが生じ、その後、関係の役割や行動が分化され組織化を促進する機能が生じるという、自己開示の機能の変化が推定される。親密化が進み対人関係の性質が変化していくにつれ、自己開示の機能もまた変化すると考えられる。

本研究の結論から、自己開示が親密化過程にはたらく機能として、少なくとも 3 種類が存在することが推測できる。第 1 には、接触頻度を増加させ、活動の共有を促進する機能である。この機能は中期段階に増加する自己開示願望と関連している。また、この機能は下斗米(1992)によって、趣味などの共通点を確認しあうことが、接触頻度を増加させると論じられている点と合致していると考えられる。第 2 には、現在の関係とは異なる時間・空間に関する領域を開示することで、関係の広がりを促進する機能である。この機能は中期段階に増加する自己開示義務に関連している。また、この機能は Altman & Taylor(1973)によって、広く深い自己開示により、関係の広がりや深さが増すと理論化されている点に類似していると考えられる。第 3 には、類似性・異質性を認知し、役割行動の分担に関連する機能である。この機能は後期段階に増加する自己開示義務に関連している。下斗米(1992, 1999a, 1999b, 2000)は、相互の類似性・異質性を確認することを通じて、役割行動の分担を行う過程により関係が親密化していくことを示しており、これは、本研究から得られた機能と対応していると考えられる。自己開示の機能は、親密段階によって変化していくと考えられる。

本研究では、従来の研究のように自己開示量などの行動側面のみを扱うのではなく、領域別に自己開示願望や義務の意識を同時に扱うことで、親密化過程における自己開示の多種類の機能を推定でき、その機能の変化に関する示唆が得られた。本研究は、自己開示量と同時に自己開示願望・義務といった開示に対する意識を分析することで、親密化過程における自己開示の機能の変化を詳細に検討した研究と位置づけられよう。

本研究の問題と今後の課題

最後に本研究の問題点をあげる。本研究の親密感評定方法において、親密化過程の初期段階というよりは、ネガティブな感情を抱いている相手を想定している調査対象者が含まれていた可能性があると考えられる。この問題を解決し、現実の親密化過程の各段階との対応がより高い方法を用いることが、今後の課題として考えられる。

本研究では、開示に対する欲求・願望の意識と、開示に対する規範から生じる義務感の意識から自己開示の機能を推定したが、これらの意識が開示行動の選択・決定においてどのような役割を担い、その結果として自己開示機能がどのように生じるのかを検討することが今後の展望として求められる。

引用文献

Altman, I & Taylor, D.A. 1973 *Social Penetration*. New York; Holt, Rinehat, and Winston.

安藤清志 1990 「自己の姿の表出」の段階 中村陽吉(編)

「自己過程」の社会心理学 東京大学出版会
Argyle, M & Henderson, M. 1985 *The Anatomy of Relationships,* London; Methuen.(吉森護(編訳) 1992 人間関係のルールとスキル 北大路書房)
Busse, W. M.O., & Birk, J.M. 1993 The effect of self-disclosure and competitiveness on friendship for malegraduate students over 35. *Journal of College Student Development*, **34**, 169-174.
Chaikin, A.L. & Derlega, V.J. 1974a Liking for the norm-breaker in self-disclosure. *Journal of Personality*, **42**, 117-129.
Chaikin, A.L. & Derlega, V.J. 1974b Variables affecting the appropriateness of self-disclosure. *Journal of Counseling & Clinical Psychology*, **42**, 588-593.
Cozby, P.C. 1972 Self-disclosure, reciprocity and liking. *Sociometry,* **35**, 151-160.
Cozby, P.C. 1973 Self-disclosure: A literature review. *Psychological Bulletin,* **79**, 73-91.
Derlega, V.J., Metts, S., Petronio, S. & Mergulis, S.T. 1993 *Self-Disclosure*, Newbury Park, CA.; Sage Publications. (斎藤勇(訳) 1999 人が心を開くとき・閉ざすとき 金子書房)
Duck, S. 1991 Friends, for life: *The Psychology of personal relationships,* Brighton; Harvester Press. (仁平義明(訳) 1995 フレンズ スキル社会の人間関係学 福村出版)
榎本博明 1987 青年期(大学生)における自己開示性とその性差について 心理学研究, **58**, 91-97.
榎本博明 1997 自己開示の心理学的研究 北大路書房
Jourard, S.M. 1958 A study of self-disclosure. *Scientific American*, **198**, 77-82.
Jourard, S.M. 1971 *Self-disclosure: An experimental analysis of the transparent self.* New York: John Wilex & Sons. (岡堂哲雄(訳) 1974 透明なる自己 誠信書房)
諸井克英 1989 友人関係への衡平理論の適用(2) 実験社会心理学研究, **28**, 131-141.
中村雅彦 1984 自己開示の対人魅力に及ぼす効果 心理学研究, **55**, 131-137.
中村雅彦 1986 自己開示の対人魅力に及ぼす効果(3) ―開示内容次元と魅力判断次元の関連性に関する検討―心理学研究, **57**, 13-19.
Rubin, Z. 1975 Disclosing oneself to a stranger: Reciprocity and its limits. *Journal of Experimental Socail Psychology*, **11**, 233-260.
下斗米淳 1990 対人関係の親密化に伴う自己開示と類似・異質性認知の変化 学習院大学文学部研究年報, **37**, 268-287.
下斗米淳 1992 親しくなる 松井豊(編) 対人心理学の最前線 サイエンス社 30-39.
下斗米淳 1999a 対人関係と魅力 吉田俊和・松原敏浩(編) 社会心理学：個人と集団の理解 ナカニシヤ出版 100-121.
下斗米淳 1999b 対人関係の親密化過程における役割行動の変化に関する研究 専修人文論集, **64**, 1-12.
下斗米淳 2000 友人関係の親密化過程における満足・不満足感及び葛藤の顕在化に関する研究―役割期待と遂行とのズレから 実験社会心理学研究, **40**, 1-15.
Walster, E., Walster, G.W., & Berscheid, E. 1978 *Equity: Theory and research.* Boston; Allyn & Bacon.
Won-Doornink, M.J. 1979 On getting to know you: The association between the stage of a relationship and reciprocity of self-disclosure. *Journal of Experimental and Social Psychology,* **15**, 229-241.

註

1) 本研究は、第 1 著者の卒業論文(平成 15 年度専修大学文学部心理学科)の一部に加筆・修正を行ったものである。本研究は、第 1 著者が企画から考察までを担当し、第 2 著者が研究計画補助、第 3 著者が解析と考察の補助を行った。
2) 本論文の執筆にあたり、御協力頂きました新井洋輔さん(筑波大学)に心から感謝いたします。
3) 本研究は、日本社会心理学会第 45 回大会(2004)において発表されたデータを再分析したものである。
4) 全体の自己開示量の総和は女性の方が有意に高かった($t(218) = 5.16$, $p<.05$)。しかし、自己開示願望・義務の総和および親密感評定においては有意な性差が見られなかった(自己開示願望; $t(218) = 3.70$、 自己開示義務; $t(218) = 3.56$、 親密感; $t(218) = 1.44$ いずれも *ns*)ため、本研究では男女を分けずに検討することとする。

An exploratory study of self-disclosure in close relationship process:

Analysis of needs and norms about disclosure

Hiroaki TANNO (*Graduate School of Comprehensive Human Science, University of Tsukuba*)
Atsushi SHIMOTOMAI (*Department of Psychology, Senshu University*)
Yutaka MATSUI (*Graduate School of Comprehensive Human Science, University of Tsukuba*)

The purpose of this study was to presume the function of self-disclosure in close relationship process by examining amounts, needs, and norms of disclosure. The targets of analysis were 220 undergraduates(105 males and 115 females). They were asked to imagine a same-sex friend and to rate the intimacy. Then amounts, needs, and norms of disclosure were measured by the Self-disclosure Scale that had been created. The main finding were: (1) There is a liner association between the stage of friendship and amounts of disclosure, (2) needs of disclosure that linked to contacts increased the middle stage of friendship, and (3) norms of disclosure tie to extend relationships gained in the middle stage of friendship, and tie to confirm similarity/difference gained in the later stage. On these results, it was presumed the functions of disclosure were differed from the stage of friendship.

Key Words: friendship, close relationship process, self-disclosure